

# 児童英語教育におけるリズム指導と発音指導に関して

池 中 雅 美

## はじめに

筆者はここ数年、幼稚園の英語活動あるいは小学校の英語教育に携わり、幼児、児童が発する英語を聞く機会が与えられている。ここでは特に幼稚園での活動を主に取り上げ考察をしていきたい。幼稚園の年中あるいは年長といった時期に、英語という異言語、異文化に触れる意義として、視野を広げ、国際感覚を身につける、他者を受け入れる姿勢を養うなどが考えられるのと同時に、より低年齢のほうがきれいな発音を身につけやすいということも必ず指摘されることである。

現在行っている幼稚園での活動は、週に約1回45分間で年間約24回である。こののべ時間数は約1,080分、一日にすると約3分の時間となる。たったこれだけの時間の中で行われる活動では限界があるのは当然であるが、少しでも効果のある英語活動を目指して行っていきたいと思っている。英語活動においてはきれいな発音を目指すことと同時に、特に幼児期において英語のリズムを身につけさせたいと願っている。

英語のリズムは日本語のリズムとは異なっている。幼児期からこの英語のリズムに慣れることによって、今後の個々の英語学習がよりスムーズにできるようになるのではないかと考える。そしてリズムの指導を考える中でマザーグースの存在に注目したい。マザーグースは欧米の子供たちが必ずや出会っているものである。そしてマザーグースには英語独特のリズムが含まれている。そこで、幼稚園での英語活動の中でこのマザーグースの効果について探ってみたい。また個々の英語の音の発音指導についても触れたい。

## 1. 英語のリズムと日本語のリズム

リズムとは何か。広辞苑によると、「①律動、進行の調子、②詩の韻律、③音楽におけるあらゆる時間的な諸関係、西洋音楽では旋律・和声と並んで基本要素の一つで、一般に音量・音高・音色などと結びついてアクセントが生じ、それが周期的に現れると拍子・拍節などの現象が成立する。」と定義されている。律動とは周期的に繰り返される動き、つまり一定の時間において同じことが繰り返されることであるによって出来上がっているものである。

英語、日本語のそれぞれの言語にはそれぞれに独特のリズムがある。英語は強勢拍のリズムを持っている。Stress-timed rhythmと言われるものである。強音節がほぼ等間隔で規則的に繰り返されることによりそのリズムができ上がっている。一方日本語は音節拍のリズムを持っている。Syllable-timed rhythmと言われている。日本語の各音節の長さがほぼ同じであるので、音節の強弱

は音の高さ、つまりピッチで強さを感じることになる。このため、ピッチの高い音節に強勢があると思ってしまうといった間違いをおかすことにもなる。このことは話者の意図することと異なったこととして発話を解釈してしまう危険があるのである。

### 1.1 英語のリズムを作り上げている要素

英語のリズムを作り上げている要素としてまず文強勢を取り上げる。文強勢は話者の言いたい事柄によって変わりえるものであり、文章中のどの語に強勢がおかれているかということを理解しなければならない。語強勢、つまりそれぞれの語の強勢がどの音節にあるのかということを知ることでも大切であるが、話者が伝えたいこととして文をまとめた語群としてとらえ、その文の中で強調される語、強勢を受ける語を知っておく必要があるだろう。文強勢には基本的なパターンがあり、強勢を受けやすい語(内容語)、強勢を受けにくい語(機能語)に分けられる。強く言う語と弱く言う語が区別されリズムを作り出す一つの主要な要素となる。強く言う語はほかの強勢を受けない語に比べて長めに発音し、弱く言う語は早く言うことで英語らしいリズムがでてくる。

リズムを作り上げている別の要素として挙げたいのは、弱化、同化、脱落、連結といった音声変化である。発話の滑らかさを増すためにも習得が必要だと思われるものである。

弱化は機能語に主にあらわれる現象で、語の子音が省略されたり、母音があいまい母音になったりあるいは省略されてしまうものである。弱化という現象を知らずにそのまま発音することでリズムを崩すことになりうる。他の現象についても同様のことが言える。同化については相互同化に目を向けたい。特に [j] の前で起こる場合 *would you* や *could you* のような語のつながりにおいては、[d] と [j] で「ジュ」という音に変化をする。このことは *would you* を発音するときにかかる長さが、*would* と *you* を離して発音される場合と同化現象が起こることを知って発音される場合では異なってくる。当然リズムに影響を与えるものと考えたい。音の脱落についても特に [t] や [d] が脱落する場合を取り上げたい。例えば、*take care*、*good day* などのように前の語末と次の語の始めの音が同じ場合、あるいは調音位置が近いもの場合には前の語末の音が脱落する傾向がある。しかし、脱落といっても完全に落ちてしまうのではなく、[t] や [d] を発音するときのように舌を調音位置にもっていき破裂させずに次の語の始めの音につなげるだけである。破裂はないが、そこにはこの音が存在するのだと思わせるために少しの間がおかれなければならない。このこともリズムを保ち、滑らかに発話されるために必要な要素であると言える。

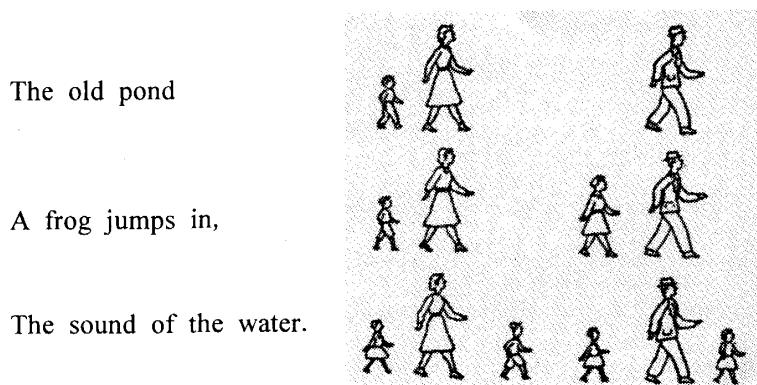
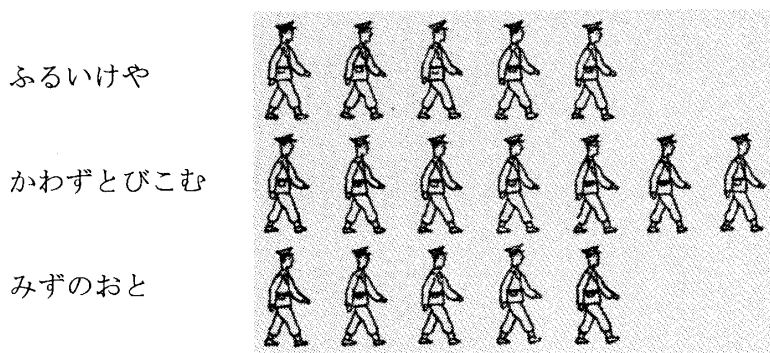
最後に連結であるが、リズムを保つために最も大切ではないかと考えている。語と語をつなげて発音することによってリズムがより明確になる。連結の中でも子音と母音とがつながる場合を強調したい。*Take it easy.* や *Have a good time.* など *take it* は [teɪkɪt]、*have a* は [hævə] となることで、強勢が置かれて強く発音される語とそうでない語との区別が明確になり、英語らしいリズムが作り出されるのであると考える。

## 1.2 日本語のリズムを作り上げている要素

日本語のリズムとは音節拍であると述べたように、リズムを作り上げているものは音節である。日本語の一つの音節は母音+子音のかな一文字である。英語の場合は母音は一つであっても子音の数は1から数個が一つの音節に含まれる。日本語の母音と子音の1対1の構成に比べ、母音の前後に子音がいくつか加えられている英語では、1音節といっても発音する長さには違いがでてくる。また、英語の強弱によるアクセントに対して、日本語では音の高低（ピッチ）によってアクセントをつけるため、日本語のそれぞれの音節の長さはほぼ同じでさほどかわらない。このことが波のような抑揚となって聞こえる英語と比較して、日本語は全ての音節を聞き取ってしまうことでより平坦で規則的な日本語独特のリズムがうみだされているのではないだろうか。

日本語のリズムは俳句のリズムに似ているそうである。5音、7音にあてはまっていると言いやすく2拍か4拍を好む傾向があるそうだ。このような言語のリズムが日常的に使用することで身につけているため、日本語のリズムで英語を読む、話す、つまり英語に日本語のリズムを適用してしまうことになっていることが日本人の平坦な英語につながっていると思う。

鷺津名都江氏は『わらべうたとナーサリタイム』の中で次のように述べている。「もちろん、日本語も自分の言語リズム素を持っていると私は確信します。そして日本語の言語リズム素の基本的な特徴の一つは「ストンピング・リズム」であり、それは詩・散文・演説・歌などのあらゆる分野での日本語の基本リズムである『一拍子』を生み出していると考えます。」また、Brown (1970) は以下のような絵で英語のリズムと日本語のリズムを表している。日本語の音節がほぼ同じ長さであることがストンピングリズムとなって聞こえるのであろう。



## 2. マザーグースにおける英語のリズム

マザーグースはイギリスやアメリカの子供たちの間で古くから伝承されてきた童謡として知られている。古くから伝承され現在まで残ってきたという点を考えると、いくつかのことが推測される。まず、伝承される方法として、書物で書き残されているのは当然であるが童謡として口頭で歌い継がれてきた点から、歌いやすいもの、覚えやすいものなどが選ばれ現在まで残ったのではないだろうか。また、現在まで残ってきたものは子供たちに好まれたものとも言えるであろう。歌いやすい、覚えやすい、子供が好きというのは児童英語教育には不可欠な要因であると考えられる。この歌いやすい、覚えやすいということを可能にしている、マザーグースの特徴とも言えるものは韻 (rhyme) を含む文が英語のリズムに組み込まれているということであろう。

### 2.1 Foot (韻脚)

英語のリズムを考えると、そのリズムを理解する上で Foot (韻脚) というリズムを構成する単位を取り上げたい。Foot とは音節が集まったもので、その音節のどれかに強勢が置かれ、同じような強勢パターンを持つ Foot が繰り返されることにより、Meter (格調) が生まれ、語が韻律的に、リズムのよいように配置されるのである。Meter (格調) には、強弱調、弱強調、弱弱強調、強弱弱調の4種類が挙げられる。

マザーグースでは、上記の4種類の中では強弱格 (trochee) が多いとされている。例えば、London Bridge is Falling Down、が日本人にもなじみの深い歌であるが、強弱の順番がはっきりして歌いやすいものとなっている。強く発音される場所で手拍子してリズムをとることも幼児には容易にできるため受け入れられやすいといえるだろう。また動作がともなった遊びを通して定着しやすい歌と言える。

```

      ×      ×      ×      ■
London bridge is fallin down

      ×      ■      ×      ■
Falling down, falling down.

      ×      ×      ×      ■
London bridge is falling down.

      ■      ■      ×
Mý fáir Lády
    
```

### 2.2 Rhyme (韻)

マザーグースのもう一つの特徴として韻を踏んでいるということが挙げられる。韻を踏ませるために言葉を選ぶということもあって文章の意味がナンセンスになることもしばしばであるが、韻を踏んでいる文章は非常に聞いていて心地よいという点に注目してみたい。

ラフカディオ・ハーンという名で有名な小泉八雲が、長男一雄に行った英語教育についてかかれたものを目にした。以下は息子の英語レッスンに用いた自筆の教材である。

The cat eats a rat.

Oh, how good

Oh, how bad

How blue

How white

How old

How cold

ここには rhyme (韻) の羅列が並んでいる。まず音の感覚を身につけさせようという意図が表れている。この音の感覚を身につけることによって、意識せずに、rhyme(韻)の面白さを楽しむことができるからであろう。

マザーグースの中でよく知られている Humpty Dumpty では、wall と fall、men と again、のように韻を踏むもの、手遊びができる Incy Wincy Spider では、spout と out、rain と again で韻を踏んでいる。

#### Humpty Dumpty

Humpty Dumpty sat on a wall,

Humpty Dumpty had a great fall.

All the king's horses, and all the king's men,

Couldn't put Humpty together again.

#### Incy Wincy Spider

Incy Wincy Spider went up the water spout,

Down came the rain drops and washed the spider out;

Out came the sun shine and dried up all the rain,

And Incy Wncy Spider went up the spout again.

韻を踏むということと強勢パターンが相互に働いて心地よさがでていのではないかと思う。人が聞いていて心地よいと感じるのはその同じリズムを感じてリズムにのれているからではないだろうか。そうすると、まず音を楽しむ、音の感覚を身につけさせるということを主眼を置き幼児期の英語教育がなされなければならない。幼いときから音に触れさせることで、異言語の感覚を身につけさせそれ以降の英語学習への橋渡しとしたい。

### 3. 幼稚園における英語活動を通して

幼稚園では英語のリズムをなるべく意識しながら、英語活動を行なってきた。筆者が実際に指導に入っていたときから、手をたたいたり、カスタネットやメトロノームを使って英語のリズムにのせて言えるようなチャンツなどを意識的に取り入れてきた。現在アドバイザーとして関わっている

## 池 中 雅 美

が、リズムを意識した活動をしたいと思っている。

マザーグースでは、今までに London Bridge is Falling Down、Hickory Dickory Dock、Head, Shoulders, Knees and Toes、Ring-A-Ring O'Roses、Twinkle, Twinkle, Little Star などを導入してみた。Head, Shoulders, Knees and Toes は中でも子供たちが大好きなものである。身体を動かして行うこと、導入した語彙が文章の中に現れているのではなく単語としてそのまま使われている点、容易に発話ができるということも理由として挙げられるだろう。また、London Bridge is Falling Down も楽しい活動の一つである。2人の指導者が橋を作り、子どもたちは輪になって歩きながらその下をくぐっていき歌の終わりに橋でつかまった子どもには英語での質問に答えさせるという活動を行った。英語の質問はターゲットセンテンスとして練習しているものである。橋につかまらないように、あるいはつかまらいたいと思う子どももいるであろうが、こういったときどき感が楽しくさせてはいるが、こちらの方に気持ちが向いてしまうことによって発話の妨げとなるということもあるのでこの点については注意が必要であろう。

反対にあまり好まれなかったと思われるものは Hickory Dickory Dock であるが、導入の仕方などにまだまだ工夫が必要であったのかも知れないが、一つにはこの歌が8分の6拍子であるということも関係しているのではないかと考える。8分の6拍子というのは日本人にとってあまりなじみがないようである。ただ、テンポの速い8分の6拍子は4拍子にも聞こえるため必ずしもこのことが好まれなかった理由であるとするわけにはいかないが、反対にある程度軽快なテンポが必要なのではないかと考える。

「マザーグースと日本人」(鷺津名都江著)の中に次のように述べられている。「耳で、口で身体に浸透したものは、時を経ても、忘れ去られてたかのように見えても、記憶が呼び覚まされるチャンスさえあれば、不思議なことにそのメロディーやリズムとともに強く蘇るものです。」私たちは小さいころに耳にした、あるいは歌った日本のわらべ歌などを今も不思議と覚えているということがある。そのときにはすぐに効果が現れないにしても幼児期に触れたことが必ず残っていくと思われる。そして、記憶を呼び覚ますチャンスを一貫教育という中で与えられることを期待したい。

「文字を使わない声の世界の記憶は、強いリズム、均衡がとれた型、反復、対句などの使用、韻を踏んだり決まり文句と慣用表現、決まった話し方など、記憶を助けるような形式にしたがっている」としている。「(児童心理学)(無藤隆著 放送大学教育振興会)」といわれていることも、まだ文字を学習していない幼児にとっては記憶を助けるような強いリズムを伴ったマザーグースが英語活動に適しているということにつながるのではないだろうか。

#### 4. 発音・リズム指導について

##### 4.1 発音指導

幼稚園での英語活動で検討課題としているものに、日本語にない音の発音指導をどうするかという問題がある。日本語にない音は [f, v, θ, ð] といった音である。英語のこれらの音をそれにより近い日本語で代用して発音してしまうという傾向がある。例えばあいさつで、How are you? I'm

fine, thank you. というやりとりがあるが、ここで日本語にない音である、[f] と [θ] が問題となる。[f] については [ファ] ([ɸ]) という日本語の両唇を使った音で代用し、[θ] についても [フェンキュウ] のような発音となってしまう子どもがいる。また、I'm fine. での [m] と [f] のつながりからどうしても [f] が [ファ] になりがちである。聞いたとおりに真似るということがまだ幼児期、つまり幼稚園の年中、年長では可能であるのではないかと考えていたが、すでに母語の影響を受けるのだということを実感している。

まず違いに気づくことが大切であると考え。違うということが認識できなければお手本となっているものに近づけようと変えていくことはできないと思う。そのために英語は違うと気づかせる工夫が必要であろう。

違いを気づかせるために、フォニックスのやり方をとりいれてみてはどうかと考えた。フォニックスは文字と音をつなぐ役割として導入されるのが目的であるが、ここではまず、文字のカードでなく絵カードを使って日本語にない音の練習をしてみようか。[f] であれば、fish, fork, fence などの絵を用意し、指導者は自分の口に注目するように呼びかけ発音する。「[f] [f] fish」のように子どもたちに繰り返して発話させるという方法で [f] という音に慣れさせるのはどうだろうか。実践にうつしてうまくいくかどうかを試してみたいと思っている。

また、英語の音を発音するために、普段日本語を話しているときには使っていない筋肉をほぐすのを目的として、口の体操をさせるのも実践で試してみたいと考えている。日本語にない音を発音させながら楽しくできればと思う。

## 4.2 リズム指導

幼稚園におけるリズム指導についてはやはりマザーグースやチャンツを導入していきたいと考えている。マザーグースには英語のリズム構造が明確に現れているので、あとはいかに効果的に導入し展開していくかを課題としなければならない。

実際の幼稚園でのリズム指導の際にはやはりリズムが一定のものの方が練習しやすいといえる。手拍子などでリズムを取りながら行う時も、リズムを乱さず練習することで発話しやすい環境が整えられ子どもの発話を促しやすくなるのではないだろうか。この点から4拍子のもの、あるいは少しテンポの速いものを選んで導入していったほうがいいのかと考える。

「児童が生き生き動く英語活動の進め方」の中で樋口氏は「リズムは心理的・生理的快感を与えるものなので、リズム練習は児童の興味を引きつけます。」と書いている。また、久埜百合氏も「文のストレスを意識させてリズムをとらせることは、強勢と弱勢のくる単語それぞれの機能をわからせることであり、語順を無意識のうちに体得する補助にもなる。」と述べている。リズムを指導することの利点、必要性が非常に確かなものであると言える。

また、マザーグースを取り上げることは、リズムを身につけさせることを目的とするだけでなく、欧米の文化を紹介するということもねらいと出来るという利点も考えられる。

4拍の強勢を持つチャンツにも目を向けていきたいと思っている。ジャズチャンツ (Graham) もリ

池 中 雅 美

リズムの指導には有効であると考えているからである。日常私たちが耳にする会話がそのまま4拍子の中に組み込まれており、曲に合わせた楽しいリズム練習が可能であると思われる。

このリズム指導については、短期大学での授業においてもマザーグースを導入することで効果が期待されると考える。輪唱できる唄や動作を伴った歌、Pat-a-cake など手遊びを伴ったものは、歌や動作を通してリズムを体験し、より長期的な定着を図ることも可能にすると思われる。

## 5. まとめ

筆者は、日本人学習者の英語は平坦であると日ごろから感じている。この英語の異なったリズムを身につけるためには、やはり幼児のころから聞き慣れ親しむことが大切であると思う。リズムを作り上げるために必要な要素、例えば音の連結、同化、脱落、弱形などといった現象も音をかたまりとしてとらえ発話していくことで、文字を学習していない幼児にとっては、リズムを身につけやすいという効果があると思われる。

英語独特のリズムを持つマザーグースのそれぞれの詩、歌などをどのように導入していくかを課題とし、幼稚園の実践で効果的な指導を続けていきたいと考えている。

## 参考文献

- 久埜百合(1999)『こんなふうに始めてみては？小学校英語』三省堂
- 島岡丘(1997)『カナ活用 英語のリズムとレダクション』洋販出版
- 中本幹子(2003)『実践家からの児童英語教育法 解説編』株式会社アプリコット
- 日本児童英語教育学会 (JASTEC) 『児童英語教育の常識—子どもに英語を教えるために—』  
株式会社アプリコット
- 原岡笙子(1994)『マザーグースで身につける英語の発音とリズム』日本放送出版協会
- 樋口忠彦編著(2003)『児童が生き生き動く英語活動の進め方』教育出版
- ピーター・ローチ著 島岡丘・三浦弘訳(1996)『英語音声学・音韻論』大修館書店
- Vernon Brown(1970) *Improving Your Pronunciation* Meirindo
- 鷺津名都江(2001)『マザーグースと日本人』吉川弘文館
- 鷺津名都江(1997)『わらべうたとナーサリライム』晩聲社
- 渡辺和幸(1994)『英語のリズム・イントネーションの指導』大修館書店